# 東南アジアの日本企業

各　位

中　村　秀一郎

6月始め、東南アジアに進出している日本企業十数社を訪問し、現場の問題点を探ってきました。現地の企業が直面する問題点として、雇用者の高い企業間移動の問題があります。タイでは、工場操業開始に先立って日本で職長クラスの人材数十人を1年間教育したのに、3年たった今日ではわずか3分の1しか残っていないといったケースは、例外ではないのです。

バンコク周辺の工業団地で驚いたのは、昼休みの時間、工場入口のロビーに、同じ団地の他工場で働いている人が採用面接に何人も訪れていることでした。比較的日本企業の進出の早かったシンガポールで、メカトロ系の企業では、作業者の定着度は高くなった反面、技術者の移動率のみが高いのですが、一般企業の側では打つ手もなく、大学・専門校卒の若い人々を指導する日本人の技術者からは、たえず同じことの繰り返しとなるから技術移転はゆっくりやろうということになる、という声も聞かれました。

こういった空気のなかで、この問題についての革新的な意見をある華僑系企業の社長から聞くことが出来ました。外為自由化の進むインドネシアで、米系シティバンクの社長は、自社の人材が他社に引き抜かれることは結局営業活動の拡大となる、と見ているとのことです。日本人では八百半シンガポールの責任者の意見が明快でした。現地の人材が外資系に入社するのは、チャレンジしがいのある仕事がしたいと思うからで、これをマネジメントが理解していないことが問題だというのです。

21世紀に向けて日本では、若い従業者の企業間流動性は高くなる予感がします。その反面東南アジアでは、すでに35才以上の管理者層の定着度は高いといわれています。長い目でみれば、アジアの労使関係は次第に均質化するといってよいでしょう。

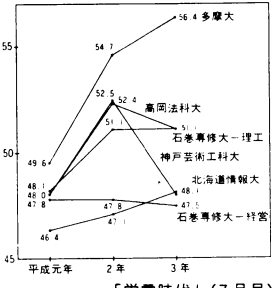
# 偏差値を考える

各　位

野　田　一　夫

本来統計用語である“偏差値”がわが国では受験用語として世間で広く使われていることは、周知の事実です。それは、目ぼしい学校の合格者の平均学力を表す数値として大手進学塾によって毎年発表され、その数値の高さで学校の社会的序列がきめられます。現在まかり通っている入試方法にはいろいろ問題がある以上、偏差値の独り歩きは誠にイマイマしい限りですが、どうにもなりません。因みに最近新設された大学の過去3年間の偏差値の推移は以下のごとくです。本学の伸びは著しいとはいえ、数値そのものは、今のところ大したことはありません。

《平成元年新設大学例》




「蛍雪時代」（7月号）

私を含め本学教員一同は、開学以来“偏差値至上主義”を打破すべく、入試方法その他であらゆる努力をつづけてきましたが、最近私は、偏差値を改めて考え直しています。キッカケは、今年から久しぶりに教室で学生に接して、彼らの予想以上の勉学心の低さに驚き呆れ果てたためです。現行の大学の教室で講義から何かを学びとるためには、とくにいい頭は必要ありませんが、ある程度以上の勉強への意欲ないし努力の持続はやっぱり必要です。入試も同じだとすると、偏差値とは、それぞれの大学の教育レベルに対応できるこの持続力の程度を示しているのかもしれません。現在の本学学生、とくに3年生にとって、この意味での偏差値の向上は、受験生時代より大学生時代にこそ切望されるものと信じます。

# 男も愛嬌

各　位

野　田　一　夫

TIMIS－108で「阪神タイガースの熱狂的ファンである私」について告白して以来12週間、その間実に多くの方から嘲われたり、同情されたり、あるいは励まされたりしました。実は最近、小生は急にオリックスを応援し始めたのです。今季プロ野球が開幕して約2カ月ほど、パ・リーグのオリックスはセ・リーグのタイガースと並んでダントツの最下位で低迷をつづけていたのですが、この1カ月余り、オリックスの奮起は著しく、いつしか5位に浮上して、更に上位をうかがう勢いです。

これもオリックスの魅力ですが、いまひとつ小生をオリックスに魅きつけるのは、全く奇妙な選手佐藤和弘内野手の出現です。硬派に属する週刊誌にすら「パンチ（パーマ）佐藤の笑撃野球」などと特集される程人気の的ですからご存知の方も多いことでしょうが、彼の人気の源泉はこれまでのプロ野球の人気選手の場合とは違って、選手としての輝かしい実績ではなく、明るく、豪気な人柄、型にはまらない痛快な生きざま、そしてそれらに全くふさわしい容貌・からだつき・服装です。

彼は打率もまあまあな上に守備もからきし駄目ですが、その存在感は抜群で、代打で彼がグランドに出てくるだけで観衆はどよめき、球場は華やぎます。ましてや、たまに好打など放った時には、相手方の応援団まで一斉に拍手を惜しまないわけですから、彼の後援会に西武の清原選手までが入会したことがよく理解できます。昔から「女は愛嬌」ということが言われてきましたが、佐藤選手の出現でつくづく考えさせられるのは今や「男も愛嬌」の時代が来たということです。最近の男子学生を見ていると、総じて気力も個性も欠落している上に、無愛想きわまりないときていますから、佐藤選手の爪のアカでも煎じて飲ませてやりたいくらいです。

# 花　数　寄

各　位

野　田　一　夫

大学教師という職業の最大の魅力は、長い夏休みです。とくにエア・コンディションが普及した昨今は、都会に居とどまって、いつもは雑務にわずらわされて簡単には読めない高踏的内容の本にじっくり対していられる時など、この職業の有難さは格別です。今週は、友人の黒川紀章氏から贈られてきた「花数寄」（彰国社）を考え考えながら読み了えました。

花数寄、聞きなれない用語ですが、もちろん黒川氏の造語です。氏は、茶道に集約されている“わび”が日本の伝統美として“寡黙で簡素な性格”として定説化されていることにいたく疑問を抱いているようです。古くは縄文文化と弥生文化、新らしくは桂離宮と日光東照宮に象徴されるように、日本の伝統美には、従来定説化されてきた“わび”と対照的に活動的で華やかな性格が共生しているというのが、氏の年来の信念であり主張です。

建築家である氏は、定説化された考え方に偏った“侘数寄”に対抗した数寄屋建築の様式を花数寄と名付け、この様式が茶の湯の歴史とともに古く長く存在しつづけてきたことを、わが国の著名な数寄屋建築をひきあいに出して検証するとともに、花数寄のコンセプトが、現代においては日本を超え、世界の建築家の共感を呼ぶものであることを強く訴えているのです。

建築界の鬼才と呼ばれる黒川氏の説は独断スレスレと思われる程個性的で、かつ表現は全編ペダンチックなにおいにつつまれています。しかし論理は実に明快で説得力があり、こういう本に接しているとわれわれは、久しぶりに「読書を楽しんだ！」という歯ごたえのある満足感を覚え、旧制高校生だったころの自分にかえった気がします。いまの大学生には、果してこうした読書の楽しみがあるのだろうかと、何となく気がかりです。

# 例の仲間

各　位

野　田　一　夫

平松さん（大分県知事）から私のオフィスに電話がかかってきたのは、3週間程前だった。「ノダちゃん、7月31日上京するけれど、仕事は8時半頃には片づくから、また例の仲間に声かけてくれない。場所はノダちゃんに一任するよ……」。男っぽくそして暖か味のあるその太い声で頼まれると、私は無性に嬉しくなって、東京にいる限り時間の都合をつけようという気になり、すぐ例の仲間に電話の“召集令”をかけ始める。

例の仲間とは、男なら阿久悠、椎名武雄、白根禮吉、鈴木義雄、鈴木哲夫……、女なら阿木燿子、草柳文恵、高原須美子、壇ふみ、中村紘子……といった面々、何れも職業こそ異なれ、日常の多忙さは察するに余りあるが、私と同じく平松さんの魅力には抗しきれず、毎回メンバーはすぐ十人ぐらいになってしまう。場所は必ずいい雰囲気のカラオケ・バー。だからといって、カラオケに打興ずるわけではない。順番に誰かが歌うのを小耳にしながら、政治・経済から社会・文化にわたる相当次元の高い話に華を咲かせる。しかも、歌の始まりと終わりには盛んな拍手という歌い手への礼儀と激励は絶対欠かさないのだ。

別に会規も会員も定っていないこの会に“例の仲間”たちの出席率はなぜあんなに高いのだろう。平松さんの人間的魅力は言うまでもないが、仲間たちそれぞれの人間的魅力も大したものである。そしてこうした仲間が集まって話に華を咲かせるのは、限りなく楽しくかつ有益な人生のひと時である。最近多摩大の同僚の何人かから、ゼミナールの効用を聞くことが多くなった。学生の勉学意欲が高まり、彼らが目立って積極的に発言するようになったという。私が“例の仲間”と過ごすように、魅力ある教師を中心に集まるゼミが学生にとって限りなく楽しくかつ有益な時間となりつつあるのが、何よりうれしい。

# 東南アジア大都市交通

各　位

中　村　秀一郎

東南アジアの大都市では、急速な経済成長が、インフラストラクチュアの立ち遅れを際立ったものとしています。地下鉄整備の進んだ香港とシンガポールを例外として、公共交通機関の未整備はたえ難いものとなってきているように思われます。バンコクでは、すでに通勤対策が企業の課題となっているのです。

だが大量輸送交通網整備の問題は、少なくとも東南アジアでは、既存の先進国にはない交通システムの評価から出発すべきでしょう。これがよくわかるのはジャカルタです。幹線道路には大型バスとタクシーが走っています。ところがここに、路線は決まっているが、どこでも乗・下車が出来るマイクロバスの相乗りタクシーも走っているのです。（これは運転手と車掌が一組となってオーナーから車を借用して運行するシステムのため、乗客へのサービスはきわめてよいのです。）

ところで、裏通りにはハジャイという名のミニオート三輪タクシーが走り、さらに、周辺地区にはベチャという三輪自転車があります。その上バス停には狭いローカルな道路に向かうオートバイタクシー（一人乗り）が数台待機しているのです。タクシーの最低基本料金は70円位ですがハジャイはその半額、相乗りタクシーはもう1ケタ安いのです。

とにかく、ジャカルタでは細かな個人サービス提供に生きる道を求めている庶民の大衆と切っても切れず、また官僚主義のかけらもない便利なシステムが出来上がっているのは驚かされます。ただちに21世紀型の交通システムを構想するより、こういうシステムを大切にしながら、中心部に乗入れている鉄道の通勤路線への転換を進め、これを大量輸送機関として活用することが、現実性ある問題解決への基本線と思われます。

# ひとつの不条理

各　位

野　田　一　夫

今年の芥川賞受賞作品のひとつは、辺見庸「自動起床装置」。題名を見た時は、読む気は全く起こらなかったのですが、この小説の主人公がある国際通信社で夜働くアルバイト学生であることから何となく読み始め、やがてひきこまれて一気に読みおえ、ひどく感銘を受けました。

彼はアルバイト先で自分より1年前からそこで働いている、総という読書家の大学生と出会います。法学部の学生であるのに総は法律の本をもっていたことはなく、常に“植物”とか“眠り”に関する本に読みふけり、折りにふれてこの2つを結び付けて語りかけるのです。宿直する社員のうち何人かを指定された時間に起こすのが彼らの仕事ですが、主人公はその仕事をやってみて、一見なんでもなさそうなこの仕事が実は大変微妙な感性と熟練を必要とすることに気づきます。また他人の眠りに接してみて、眠りの世界が人間にとって起きている世界以上に複雑怪奇な深さと広がりをもつことを知るにつけ、主人公は、色白でひ弱わそうな総の個性的才能と人柄に引かれていきます。もちろん、読者である私の気持ちは主人公と一緒に総にかたむいていくのですが、その過程で徐々に気になっていったことがありました。それは人間の能力評価についてです。

法学部の学生として、総は優等生ではないはずです。単位を落として卒業もできないかも知れません。いや、法学部へ入ったことがもともと誤りだったのです。もし私が法学部の教師でしたら、総は私から無能のラク印を押されたことでしょう。多摩大学で私が「どうしようもない奴」と評価し、とくに退学勧告までした学生の中には、現行の大学制度の中で不当に評価される総のような若者がいっぱいいるに違いありません。その不条理をしきりに感じつつ、私はこの小説を読み続けたのです。

# 今、縄文ブーム

各　位

野　田　一　夫

常に受身であるために一向解決のメドのつきそうにない対外経済摩擦、国際政治の舞台でのわが国リーダーの余りに情けない無能ぶり、“踏んだり蹴ったり”の感のある各国の対日論調……こんな中で、最近日本人は深層心理的に自己嫌悪に陥っているせいでしょうか、マダム・クレッソンの暴言さえ、いちいち思い当たることばかりで、反感さえ心に湧き上がってきません。だからこそ、今俄然、“縄文”がわが国社会でブームになったに違いありません。

先週終わった今年の天城会議（TIMIS－73参照）でも、問題提起者の梅原猛氏は、現代日本文化の深層には未だ脈々と縄文文化の伝統が流れているとされ、かく言う自分は「（農耕型社会には全く不向きな）縄文人である」と胸を張り、喝采を浴びました。稲作技術が中国からもたらされて弥生時代の幕があける前の6～7,000年間、全島森林に覆われていた日本列島に住んでいた縄文人は当然狩猟民で、事なかれ右へ倣え式の現在の平均的日本人よりは遥かに行動的、個性的、かつロマンティックな人間的属性にあふれていたと十分推定されます。

ところで、縄文のふるさとは東北地方とのこと、盛岡を父祖の地とする私には何となく誇らしい気がします。天城会議の帰途列車の中で手にした『AERA』（8．27号）には、坂上田村麻呂を相手に奮戦した幻の蝦夷の英雄アテルイの血湧き肉踊る物語が……。「蝦夷というのはアナーキーで、こせこせ管理されたり、組織に組み込まれるのがきらいな人たちだったと思う…」という詩人相沢史郎氏の談話に思わずヒザをたたきながら、何か子供の頃から生まれ育った国を好きになれなかった自分自身のことがやっと解ったような気がしました。日本社会は今こそ、縄文人の立場からの大改革が必要と思われます。

# 大学史はついに……

各　位

野　田　一　夫

最近、学内誌に巻頭言を求められ、次の一文を草しました。

「大学史はついに、多摩紀に突入した」、今年の本学の案内書の表紙を飾るキャッチフレーズだ。このフレーズは、エージェントの案をしりぞけ、強引に押し込んだ私自身の作だ。別に自慢するわけではない。多摩大学の創立に参加した関係者全員は、正にこの理想と意気込みをもって、事を始めたのだ。

幸い多摩大学が打ち出した教育方針や方法は、そのことごとくが予想外に世間の反響を呼び起こし、数えきれない程各種のマスコミに報道されつづけてきた。今や多摩大学は「新しい小さい大学ながら、本格的教育を目ざす個性的大学」として高い評価を確立し、その知名度も高い。しかし、世間的評価や知名度は、実態からかけ離れがちであることを忘れてはならない。

多摩大学の学生のうちで、多摩大学の教育の現状に満足し、多摩大学に誇りをもっている者は何割いるか？ 多摩大学の教員の中に、学生の現状に満足し、毎日充足感をもって教壇に立つ者は何割いるか？ どちらの問に対しても、その答は世間の予想を下廻るに違いない。しかし諸君、そんなことに失望したり落胆してはだめだ。私はそんなことを何とも思っていない。

われわれは高い理想をかかげ、確固たる信念をもってスタートした。2年や3年で簡単に達成できる理想が高かろう筈はない。数年の成果を見て一喜一憂する信念が確固たるものであろう筈はない。多摩大学の創立の理想がいささかでも実現されるためには、少なくとも5年いや10年の歳月が必要だ。しかし、われわれの理想が幻でなかったなら、努力を怠らない限り、それは必ず近い将来力強く実現されていくに違いない。われわれは常にそのことを自分の心に言いきかせ続けようではないか。

# 成功の甘いワナ

各　位

野　田　一　夫

中尊寺ゆつ子さんの漫画家としてのセンスを愛好していた僕は、今つくづく失望感を味わっています。仕事に追い回されているせいか、作品の質は最近とみに低下気味です。例えば、週刊SPA 9月4日号の「サンプリングしてみる」に至っては、専門用語の使い方がデタラメ、読者の方が恥ずかしくなります。

これを読みながら昔観た映画「A CHORUS LINE」の感銘を懐かしく想い出しました。ブロードウェイの舞台での端役を獲ちとるための俳優志願者たちのすさまじいまでの日々の修練、どっとオーディションに押しかけた彼らの中からほんの数人を選び出すために、恋人とのデートまですっぽかして徹夜する演出家の執念……、あのきびしいプロの世界は、現在の米国社会にまだ残っているでしょうか。

ちょっと可愛い顔をして歌を唄えば忽ち歌手としてデビューでき、ちょっとお喋りがうまくて本でも一冊書けば忽ち評論家としてブラウン管に登場するというわが国社会の風土では、降って湧いたような人気のために、タレントはすぐ有頂天になり、ワンサとくる仕事をこなすために、基礎的な勉強をなおざりにします。このために、せっかくの才能の芽も大部分は結局短期間で枯渇するか、異常な方向に成長する他はないようです。

まだ問題があります。情報の“国際化”によって、今や日本での人気はすぐ世界に報道されます。先日も THE JAPAN TIMES は彼女の人気作品をとり上げ、（社会人になってからも）両親のスネをかじり、（ロクな仕事もしないで）全収入を遊びに投じて北欧にゴルフ旅行し、ビバリーヒルズで宝石を買い漁る“OL”族を皮肉っています。OL経験の全くない一漫画家のつくり上げた虚像が、外国人の日本人への誤解や反発の一因とならないことを、切に祈るのみです。

# 石井和子さんのこと

各　位

野　田　一　夫

9月15日の“敬老の日”は、私にとって、私より年上でなお素晴らしい生き方をしておられる方々のことを考える日です。今年のその日、私は石井和子さんから贈られた新刊の翻訳書『シュリーマン旅行記　清国・日本』（新潮社）を読み、ひどく感銘を受けました。石井さんは、親友石井宏治君（石井鐵工所社長）のご母堂、著書H. シュリーマンは、トロイアの発掘で世界的に名を成した考古学者、そして訳業のキッカケは、かねてからシュリーマンに憧れていた石井君が先年欧州出張の折、パリの国立国会図書館でフランス語版の原書を見つけたことです。

石井君はMITで工学博士号をとった程の秀才ですが、自分で読みたいこの本の翻訳を母親に依頼されたとのこと。一方石井さんは、先年ご主人を亡くされたあとの整理を終えられると、気持ちの切り替えのため、昔身につけたフランス語をブラッシュ・アップする目的で「3年つづけてパリで、寂しいけれど自由な“学生暮し”」を送られて帰国され、息子さんからこの大役を引き受けさせられたとのこと。フランス語とはいえ、何しろ出版年は130年昔、訳業がラクであろう筈はありません。それに内容は幕末期の日本。訳者は江戸時代の文献を渉猟し、東京や横浜の古跡に足を運び、多くの専門家の門をたたき、読者のために訳書を原書以上のものとすべく大変な努力を重ねられた筈です。同書「訳者あとがき」の短くつつましい名文が、翻訳の苦心の跡を何よりもよく物語ってくれます。

しかし誤解なさらないで下さい。この名文には、課せられた重荷としての訳業の苦しみはいささかも感じられません。むしろ、苦心して創造的な仕事ととり組んだ彼女の満足感が行間至るところに躍動しているのです。今年64歳を迎えた私にとって、石井さんの存在を知ったことは、この上もない励ましでした。

# 移ろいやすきは人の心

各　位

野　田　一　夫

「……稽古も怠ければ女性問題はひき起こす、こんな（琴錦のような）力士が優勝したことは、私のように（学生時代に）優等生でなかった者には、殊に嬉しいですね……」僕が毎朝視ているテレビ朝日の「やじうまワイド」の解説者塩田丸男さんのこのひと言、今週最も印象に残る暖かい言葉でした。

“若貴”人気一色で始まった今場所でしたが、両横綱の休場などがあって、取り組みは総じて盛り上がりは少なかったものの、琴錦の全く予想外の大活躍がどうやら大相撲の人気を千秋楽までもたせてくれたといえます。琴錦は今まで僕にとって全く興味のない力士でしたが、今場所だけは、僕は後半になって彼を本気で応援しました。彼がもし優勝したらマスコミがどんな反応を示すのだろうかということに興味を抱いたからです。

若貴両兄弟は稽古熱心で、まじめで、親孝行で、加うるに兄弟仲も抜群だという点で、最近では見上げた若者であるようです。しかしこうした事実は、マスコミによって多かれ少なかれ誇張されることも否定できません。マスコミにとって“善玉”には“悪玉”の存在が必要です。その点、稽古はさぼり、女遊びには精を出し、おまけに八百長の噂まであった琴錦は、正に格好の攻撃材料となったのでしょう。しかしその報道にも多少とも不当な誇張はあったに違いありません。

琴錦はそれを不当と感じたが故に、言い知れぬ社会的圧迫をはね返し、実力で世間を見返したのだと信じたいものです。群れ寄る記者達の質問に対し、言葉少なめに答える彼の眼に涙、あれは果して真の嬉し涙だったのでしょうか？「勝てば官軍」というあさましい世の中だからこそ、わずか数日でマスコミがつくり上げた新しい英雄像に琴錦関が酔いしれることのないよう、くれぐれも自重を、と切に祈る気持ちです。

# 当世就職事情

各　位

野　田　一　夫

いよいよ秋十月。産業界入りを希望する来年度大学卒業予定者諸君は，待望の「採用内定通知」を各社から受けとることになります。もちろん，建前だけのことですが…。というのは，主要な企業等関係団体と主要な大学等関係団体との間で結ばれている「就職協定」によると，会社説明会とか会社訪問が公けに許されるのは8月1日ですが，実際には，ほとんどの企業の求人活動は春先には始められ，8月1日までに多くの学生は，実質的な“採用内定”をもらってしまっているからです。

内定といっても最近の学生のことですから，複数社の内定を前提に就職先をゆっくり値踏みする者がふつうです。企業は企業で内定者に対して引き留策として，あの手この手を考えて実行します。傑作なのは，“学歴打破・実力主義”を標榜しながら，内定者を3分し，一流校卒はハワイ，二流校卒はグアム，三流校卒は東京ディズニーランドへと“研修旅行”を実施し，学生側のヒンシュクを買ったりする会社もあったことです。

さて，本学にも来年はいよいよ4年生が登場し，こうした矛盾をはらんだ求人求職の渦の中にまき込まれていくわけです。幸い各種のマスコミ報道を通しての広報効果のおかげで，産業界から本学への期待は予想外に大きく，多くの先生方に対して，求人の打診やら申し込みがひきをきりません。しかし，そのことにかえって責任を感じた私共は，近く3年生を対象に長期的に「就職講座」を開講し，礼儀・作法や言葉使いをはじめ，学力以外の人間的属性の錬磨に努めたいと考えております。

一方来る11月18日(月)には東京丸の内の日本工業倶楽部で「企業と多摩大学の懇親会」を開催し，広く産業界各社に本学の経営理念や教育方法を認識して頂くつもりです。ご出席ご希望の方はTIMIS事務局にご連絡下されば幸甚です。

# 上々のスタート

各　位

野　田　一　夫

近い将来の本学の学部ないし学科増設計画については、すでにTIMIS − 12にて構想を述べさせて頂きましたが、最初に着手するのはレストラン・ホテル学部（ないし学科）になる可能性が大です。何といっても、卒業生を受け容れるこれら産業の規模が急速に拡大をつづけているのに、少なくともわが国の4年制大学には、立教大学の観光学科を除いてはその分野へ送り出す人材を意識して組織された教育機関がないからです。

かといって学科はもちろん学部の設置も、本学の一存でできるわけのものではなく、道を踏んで行けば、実現には3〜4年の歳月がかかりましょう。そこで本学では来年春を期し、現在の経営情報学部内にレストラン・ホテルコース（仮称）を設置するとともに、このコースに入った学生も受講できるホテル・レストラン・リゾート関連の「社会人講座」を、都心の交通至便の場所で夜間に開講すべく準備を始めました。

何しろこの分野は、これまで立教大学のみが長年培ってきた領域で、各業界の信用も抜群ですが、幸い24年前「観光学科」を設置するに際して責任者の役割を果たし、また設置後5年間初代学科長をつとめたのは小生ですので、小生としては、“古巣の同僚”に協力を求め、末長く手を組んで有無相通じ合いながら、教育・研究両面で該業界に貢献していく方針です。

この方針に沿って、私共はまず10月4日に、多摩大学総合研究所・立教大学観光研究所主催でセミナーを実施しました。場所は平河町の『日本海運倶楽部』国際ホールでしたが、参加申し込み者は定員300名を遥かに越すという上々のスタートでした。私共は11月中旬には東京・大阪で「21世紀のホテル」と題する公開セミナーを開催致します。ご関心のあられる方々は、どうかTIMIS事務局にご連絡下さい。

# 人はオカシクあるべきだ

各　位

野　田　一　夫

この日曜日、久方ぶりに雲間から洩れた薄陽に浮かれた気持ちになって、新宿に出かけました。目的は三越美術館で開催中の「ダリ展」。行きの地下鉄の中で、昔ニューヨークのホテルのエレベータの中で偶然ダリと乗り合わせた時のことを懐かしく想い出しました。私の乗っていたエレベータに彼が入ってきた時、あの独特のヒゲとギョロ目ですぐダリだと分りましたが、眼が合うと彼は、「日本人か？」と話しかけてきたのです。「……日本人なら誰でも貴方のことを知っているよ……」と答えると、ニヤリと笑った彼が「日本人は不敗のサムライだ」と刀を抜くような身振りでおどけた姿が忘れられません。

「ダリ展」は予想以上の混雑で入場券の売り場は長蛇の列でした。平和で豊かな民主主義社会では、あらゆる分野で凡庸な人物が指導者に選ばれる結果、大衆は凡庸さに食傷します。その意味では、今世紀最後の天才画家といわれるダリに対して、人気が集まるのは当然のことでしょうか。先日の新聞によると、文部省でも遅まきながら“天才児”を育てるために「教育上の例外措置に関する調査研究協力者会議」を設置するとのこと。教師の方がとても非凡とは思われないのに、天才児はどうやって育つのか疑問ですが、成果を待ちましょう。

現在の大学入試の“偏差値”は、凡人の中での優劣を決める典型的指標ですから、上述の風潮の中では愚弄の対象とならざるをえません。たとえば、今週土曜からビートたけし主演のフジテレビの新番組「平成教育委員会」が始まりましたが、その宣伝文句に曰く「“変差値”重視！　偏差値を笑い飛ばせば日本晴れ。人はオカシクあるべきだ」と。今後の大学入試は“変差値”とか“個性値”（衛藤瀋吉氏）をもっと重視すべきですが、果してそれらを測定する客観的尺度となると？……。

# りえ・エフワン・学園祭

各　位

野　田　一　夫

21日カナダから帰国した宮沢りえに報道陣が殺到し、正に成田空港では阿鼻叫喚の騒ぎ。記者会見には、いい歳をした新聞・雑誌記者200名が神妙な顔で出席、滑稽でした。それもこれも、18歳の彼女の“衝撃ヌード”写真集出版の余波ですが、それにしてもその予約申し込み数30万部とは……。20日、鈴鹿サーキットで行われた「F1世界選手権日本グランプリレース」には、日本全国から15万ものファンが押しかけ、スタンドは大入満員の盛況。その晩の8チャンネルの録画放送の視聴率は何と20.8％、約600万人がブラウン管の前にクギづけになったことになります。結局は、“エフワンの星”中嶋悟に対するセンチメンタルな人気によるものでしょう。

20日、21日両日、本学では学園祭が開催されました。豊田武志君を委員長とする実行委員会のメンバー20名を中心とする学生諸君の努力の賜、両日とも好天にも恵まれ、行事は万事順調に終了したようで、ホッとしました。ただし、人出は今ひとつの感あり、残念でした。実は昨年、私は直前になって学園祭を中止させました。準備が大幅に遅れていて、大勢の人々にとてもお出で願えそうにもないと判断したからです。しかし、この措置は実行委員会の学生をひどく落胆させたため、今年私は、最後まで目をつぶっていました。ところで、学園祭当日、渡されたパンフレットの出来は装丁内容とも予想以上で、私は改めて感心しました。が、製本が完了したのが学園祭の3日前と聞いて、思わず口をアングリ……。宮沢りえや中嶋悟の人気をもり上げたスサマジイ商業主義と対照的に、学生諸君は“観客動員”意識が余りに希薄です。観客の少ない芝居で役者の芸は磨かれません。学園祭実行委員諸君！　今年はよくやった。しかし、“観客動員”こそ来年の最大の課題ではないだろうか。

# 山気佳日夕

各　位

野　田　一　夫

長谷川恒男氏は、ヒマラヤの未踏峰ウルタルⅡ登頂中、先月10日、雪崩のため遭難死されましたが、その生前最後のインタビューが『週刊文春』（10月31日号）に掲載されました。「……誰にも生きている実感というものがあるでしょう。仕事をしている時の充実感、趣味に打ち込んでいる時の充実感、……そういう意味でも、山登りは僕の人生そのものです……」と語る氏が一番愛した言葉は、意外にも「山気佳日夕」とのこと。好天に恵まれて一日の山旅を終え、小屋で夕食を済ませたあと、窓外に夕暮れの山なみを眺めながら味わう何ともいえぬ充実感……。若い頃、毎年何十回となく狂ったように山へ登り続けた僕にも、この気持ちは痛い程懐かしく想いかえされます。

長谷川恒男といえば、僕達のようなアマチュアにとっては、神様のような存在。何しろアルプスの三大北壁の冬季登頂にことごとく成功、とくに名にし負うアイガー北壁に関しては世界初という輝かしい記録が山岳史に残っているのです。しかし最後の山旅へ出発前の氏の心境は、「……体力、技術力、僕の登山家としての頂点は、残念ながら、もう過ぎてしまったと思ってます。今は下り坂。これからどんどん下がって行って、結局、最初のスタートライン、15歳のときの自分に帰ってゆくんだろうと、今はそんな気がしています」と想像を絶する謙虚さ。

氏の登山は、15歳の時丹沢へ登り生まれて初めて“おだやかな自然との触れ合い”を体験して以来とのことですが、山岳家としてあれだけの超人的偉業を次々と成し遂げながら、40そこそこの年齢ですでに、氏は自らの限界をきびしく受けとめていたのです。今週は、72歳の自民党総裁誕生。宮沢さんは立派な政治家でしょうが、氏の人生で、果して政治家としての能力は今最盛期なのかどうか、それだけが気になります。

# Miss Saigon

各　位

野　田　一　夫

先週から今週にかけて5日間、珍しくマンハッタンの中心から離れることなく過ごしました。時間的余裕にも恵まれ、またワイフを伴ったこともあって、連日ミュージカルを楽しめました。楽しむといっても、これまで俳優の早口の英語が理解できずいつも欲求不満を感じてきたので、今回は目標をストーリー性の強いものに定め、その筋書きを日本にいる間に完全に覚えて行きました。米国の劇場で手に入るプログラムには、出し物の筋書きなぞ見当らないのが普通だからです。

経済は低迷し、街は汚れ、犯罪は横行するとはいえ、ニューヨークは何といってもミュージカルの本場。丁度30年前僕がはじめて観た「The Fantasticks」がまだオフ・ブロードウェイの劇場でロングランをつづけ、例の「Cats」の上演年も2ケタに入りました。ところで、今回の僕の最大のお目当ては「Miss Saigon」。若い美しいベトナム娘と米国軍人との悲恋の物語り。このミュージカルがまずロンドンで大ヒットした後大西洋を渡って、いま日ごと夜ごとニューヨーカーを感動させています。筋書きが頭に入っていた上に素晴らしい歌と演技、それに目を見張る舞台装置で、僕も感動し暫し時を忘れました。

「Miss Saigon」で主演のキム役を演ずるのは明眸のフィリピン女性リー・サロンガ、同じ日の夜、リンカーン・センターのメトロポリタン・オペラで観た「魔笛」のプリマドンナは韓国のヘイ・キュン・ホン、ともに最高の歌唱力で満員の観客を魅了しています。“国際化”はこの面でもごく自然な形で進展しています。若い世代の諸君がこうした国際化の趨勢に対応し、教養を深め感性を磨き外国語をものにし、人の和を世界に拡げる努力を傾けたなら、彼らの人生は、僕達の世代では味わえなかった程豊かなものとなるのでしょうが……。

# 萬里の長城

各　位

野　田　一　夫

来週が楽しみです。月曜から水曜まで、毎夜TBSの大型連続番組『萬里の長城』が放送されるからです。「宮沢りえのヌードにヘアは写っているか」などという愚にもつかぬ話題をやっきになって追っかけているマスコミに嘔吐を感じている向きには、この番組は多分一服の清涼剤となってくれるものと信じます。何しろ取材陣が、井上靖氏の指導のもと、4年の歳月をかけて万里の長城をくまなく踏査し、世界ではじめて映像記録された成果を、7時間の作品にしてわれわれに公開してくれるわけです。腰をすえて対せざるをえません。

丁度1年前、僕は北京郊外の万里の長城の石段に腰をおろし、山なみの彼方地平線まで続いている長城を眺めて何時間も呆然としていました（TIMIS－83)。壮大な中国史に想いをはせつつ西へ西へと長城の上をどこまでも歩いていきたかった…その時の僕の願望を、この番組が充してくれる筈です。延々6500キロの長城の西の果ては敦煌、井上靖氏がその代表作の題名とした辺境の町。この作品を読み進んだ読者は誰でも、主人公趙行徳の波乱の人生の後半の舞台となった没落前の敦煌の都のたたずまいを、知らず知らずのうちに頭に描いた筈です。

だが、僕も後から知って驚いたのですが、井上氏がこの地を初めて訪れたのは、作品刊行後20年経ってからでした。しかも、誰よりも敦煌への旅を憧れつづけていた氏は、その地に着くと同行した夫人に一言「想像していた通りだ」と呟かれたとのこと。膨大な文献を渉猟し尽くしたとはいえ、氏の想像力の凄さには舌をまく他はありません。ものを知っていること（知識）と、より高次元の発想のできること（見識）とは全く違うものですが、現行の大学教育は果して“見識ある人材”を育てようとしてもろもろの知識を学生に授けているのでしょうか。

# 永平寺　晩秋

各　位

野　田　一　夫

先日、新しいゴルフ倶楽部ができたからと関西の友人に誘われるままに、早朝の新幹線で西下しました。が、米原駅に降り立つと、余りの上天気に気が変わり、車を借りて、そのまま独り気ままな旅に出ました。北陸道を北へ、目指すは永平寺。僕の家は禅宗ですから、かねてより一度曹洞宗の大本山へお参りしたいと思っていたのです。

わが国は仏教国だといわれていますが、残念ながら、日本人がそれを意識するのは葬式の時ぐらいのものでしょうか。しかし僕はちょっと違います。15歳の春、僕がひとつ年下の少女との結婚を真剣に考えていることを知った中学の恩師が、三河の山奥にある禅寺へ僕を送りこんだからです。それから約1週間僕は早朝から深夜まで、懸命に「般若心経」を唱え続けました。或る日夕食の後、この寺の住職は僕を庫裏へ招じ入れ、般若湯など飲みながら、実に遠まわしに、一途な恋に思いつめた僕を説諭してくれました。住職の教えてくれた煩悩（ぼんのう）とか涅槃（ねはん）といった仏教用語の意味をどれ程理解できたのかは解りませんが、翌朝、庭の沈丁花の香りが薫風となって堂内に満ちわたる中で一心に座禅を組んでいた僕の体内に突然、愛の本質に目ざめたのだという快感が襲ってきたのです。

……50年後、永平寺の大法堂の階段に腰を下ろし晩秋の庭に目をやると、見上げる老杉の木漏れ日を浴びて金色に輝く公孫樹の黄葉……、僕の心には、あの少年の日のほろにがくも甘い想い出がふつふつと湧き上ってきました。帰り道の車の中で、カーステレオから流れてきたアリスの「秋止符」を口ずさんでいると、時代は変わっても若者たちの繊細な情感は昔も今も全然変わっていないという気がして、ひどく心が安らぎました。これから、学生達にもっと優しくしなければと思っています。

# それぞれの青春

各　位

野　田　一　夫

先日の日曜日の朝、ワイフは娘と一緒にデパートへ、息子どもはそれぞれガールフレンドとデートへ……残されたのは家の主と猫だけ、われわれの年齢の男にはよくある状況です。新聞なぞ丹念に読むうち昼となり、お腹も減って、カレーライスが無性に食べたくなりましたが、残りメシにインスタントカレーでは余りに侘しいと、服装をととのえて外出。赤坂はTBS本社地下のカレー専門店 Top's & saXon に向いました。味も雰囲気も僕の気に入りの店です。

案内されて席へ着き、渡されたメニューを満たされた気持ちで見ていると突然「学長！」と思いがけぬ呼掛け。何とこの店では、本学の高崎尚彦、九鬼崇両君がアルバイトでウェイターをしていたのです。立教時代と違って、多摩大に来てからははじめての経験。両君の礼儀正しくキビキビした応対にすっかり嬉しくなり、両君を激励したり支配人に挨拶をしたりして……、店を出てからもその日は一日中、殊のほかご機嫌でした。

実はこのところご機嫌なことが立て続けです。今月はじめ開催された Penn Collegiate Tennis Circuit で本学のテニス同好会“アボガド”の諸君は、男子64組、女子10組のチームの間でせりあい、男女揃って準優勝を遂げました。18日学長室へ大場達也、上山哲生、久保田剛、村上千予、山口美紀、佐々木恵子、酒井有子の諸君が届けてくれた盾は、学長室を飾ってくれています。先月20日に開催された全日本通信珠算競技大会の高校・一般の部では、斎藤聡子、川口嘉治、高田広忠3君が、昨年につづき今年もまた見事団体総合優勝、この優勝杯は今図書館に飾られています。

何と頼もしいそれぞれの青春！秀さんと語り合い、近くこの学生諸君を全部集め、一大コンパを開くことにしました。

# 本田宗一郎さんを偲ぶ

各　位

中　村　秀一郎

本田さんに初めてお会いしたのは、1973年日経流通新聞に連載中だった経営者論『商魂の系譜』の取材のためだったと思う。

その晩ご馳走になったときのことである。西銀座の小料理屋の二階に上がるやいなや、本田さんが階下に向かって「おかみ、おれの運転手にめしを喰わせろ」と大声で叫ばれたのにはびっくりした。帰途、本田さんに自宅まで送っていただいたハイヤーの運転手さんは、「社長が私達にいろいろと気をつかわれるので、全く恐縮しています」と語っていた。

1986年、中国社会科学院と本田財団との共催による「技術文明」に関するシンポジウムの際、本田さん主催のパーティーが北京のシェラトンホテルで開かれたときのことである。

宴がお開きになったとき、本田さんは会場の一角で「北国の春」をはじめポピュラーな曲目を演奏していた楽団の前に足早に行かれて、「皆さんご苦労さんでした」と挨拶されたのには感動した。中国の偉い人たちも驚いたようである。楽団のメンバーは大喜び。本田さんは多くの人たちに支えられて自分があるという自覚をたえず、持ち続けられた方であった。

本田さんは社長時代にもハイヤーに乗っておられた。なぜ社用車でないのですかとお尋ねすると、50年代半ばに廃止されたとのこと、その理由として女房子供などが利用するといった公私混同を招きやすいこと、運転手が機密を知っていると思われやすく、そのため不幸に陥る心配があるため、といわれていた。のちにロッキード事件に関連した元総理の運転手自殺の報に接したとき、本田さんが考慮されていたのはこのことだったのかと知った。

このように本田さんは、まわりの人たちに行き届いた気配りをされた方であった。

ファッション・ファクトリー・ブティック
各　位

中　村　秀一郎

「みなとみらい21」にオープンした国際展示場「パシフィコ横浜」で、世界テレポート連合総会メインイベント「ファッション・ファクトリー・ブティック」が、11月20日から三夜開催されました。主催者側のねらいは、情報社会におけるファッション産業のあり方を示すことにありましたが、それは催しの中で見事に演出されたといってよいでしょう。

この催しは3つの場面から成り立っていました。その第一は、若手デザイナーのポープ田山淳朗のパリのアトリエでのファッションショーを宇宙衛星経由で会場の大画面に映し出し、その中から会場で参加者である市民（女性3人子供1人）が自分の好みのジャケット、パンツ、水着、ニットウェアを選出したことでした。その第二は、ファクトリー・ブティック。選ばれたデザインによるモノづくりが直ちにスタートし、約50分でこの会場で完成したことです。そのため最先端のCG、CAD－CAMをはじめとする生産設備が舞台に設定され、オペレーターたちの仕事が演示され、工場と店とがそこでは完全に統合されたのです。その第三は、参加者に話題を提供するファッショントークショー。第1日目には本学の望月照彦教授が、3日目には、私が（財）衣服研究振興会理事長の肩書で、ゲストの一人としてこれに出演しました。

この催しの衝撃は極めて強烈だったと信じます。それは、アパレル産業がまさにコンピューターとメカの塊となり、働く人々は3Kに全く拘りない技能者となっていることを示してくれるとともに、ファッション・ファクトリー・ブティックのオーガナイザーとして田山氏のような新しい地球型デザイナーが世に登場したことを、私たちに知らせてくれたからです。

# コミュニティ・カレッジの明日

各　位

中　村　秀一郎

「新しい市民文化の創造」を掲げ多数市民の参加のもとにすすめられた今年度のコミュニティ・カレッジも、12月7日で全日程を終了しました。

翌8日、早速新しい運営委員会がスタートしました。受講者の方々のご意見を踏まえ、来年度は企画段階から市民の側より、安西綾子、市川周、及川裕史、中村琴美の4氏に参加戴くことにしました。同時に学生からも委員を公募した結果、伊藤裕史、小田部拡史、島尻剛、七尾賢太郎の4君が名乗り出てくれました。それに大学（総研）側から椎木哲太郎所員ほか1名が加わり、10人の運営委員で企画・運営を進めます。

公開講座を行う大学は増えていますが、市民委員・学生委員の参加による運営方式は前例がなく、今後、公開講座における「多摩大方式」として注目を浴びるに相違ありません。

早速、今年4月に静岡理工科大学が開学した袋井市から視察がありました。市民、学生、大学人、それぞれの異質な発想が相互に影響を及ぼし合い、より高次の知的エネルギーの台頭が期待されます。試行錯誤の中から、長期的に大学と地域・市民との新しい“創造的な関係”を創り上げたいものです。

委員会では来年度は「豊かなライフスタイルと社会」（4～5月）、「地球環境問題を考える」（6～7月）、「企業と市民の新しい関係」（9～10月）、「家族する時代」（11～12月）の4つのテーマに沿って、一方的な講演形式ではなく、受講者と講師の対話を重視する“参加型”の講座をめざしています。

これまでの既存の類似の催しとは一味違った、国際性・専門性・学際性の高い講座として、地域市民生活に無くてはならない存在にしたいと願っています。講師やテーマについて、是非とも運営委員会宛にご意見をお寄せ下さい。（TEL0423-37-7185）

# 栄華の巷・偸安の夢

各　位

野　田　一　夫

年末の渋谷の喧騒の中を人波にもまれて歩いている時、ひょっと思いがけない言葉が心に浮びました。「……偸安（とうあん）の夢に浸りたる、栄華の巷低く見て……」、古い世代の日本人なら誰でも知っている、旧制一高の寮歌の一節です。40余年ぶりにこの歌を独り小声で口ずさみました。歌詞の随所に、戦前の旧制高校生の鼻もちならないエリート意識がにじみでている一方、現在の日本人が失ってしまった何かが一貫して流れているように感じました。その何かとは、強いて表現すれば“憂国”です。“憂国”という言葉は、戦後打ちつづいた平和の中で、空前の経済的繁栄を謳歌している日本人には、も早死語と化してしまっています。元来天下国家を考えることも論ずることも好きでない僕が、よりによって盛り場の雑踏の中で、このことに思い至るとは、やはり今年ならではです。

イラクに対する米・多国籍軍の電撃作戦で幕が開き、ソ連邦の崩壊で幕が閉じられたことが象徴しているように、今年は国際情勢が文字通り激変をつづけました。世界の多くの国々では、国民がこの激変を重く受けとめ、リーダーはその対応に懸命な努力を傾けたのに、ひとりわが国だけは、リーダーは国際適応能力の驚くべき欠如を天下にさらしたのみか、国民は国民で、嵐の世界をはた目に、ひたすら飽食とエロ・グロ・ナンセンスの日々を送ってきたとしか思えません。コメにせよPKOにせよ、政治家も国民も、どれ程真剣にそれに対したのでしょうか？。卓越した経済力にふさわしい国際的責務を積極的に果たす気の全くないこの国を、世界がいつまで容認しつづけるでしょうか。“バブル”がはじけ、たのみの経済の行方にも黄信号が灯って、平成３年が終ろうとしています。より厳しい環境の中で、来年こそ日本人の真価が世界的に問われる年でしょう。

# 第2の創業期

各　位

野　田　一　夫

新年おめでとうございます。

多摩大学にとって、今年はひとつの区切りの年です。2月の入試で4期生が決まり、4月からは初めて4年生が生まれ、春から夏にかけて第1回卒業生のための就職活動が本格化します。

約3年前、新設認可を受けた大学のひとつとして新聞の片隅にささやかに掲載された多摩大学は、世間的には全く無名の大学でした。しかし、平成元年4月開学後本学が次々に実施していった教育上の施策は、久しく日本の大学に定着していた因習を打破するものとして多くのマスコミの注目するところとなり、本学独自の教育理念ともども広くいろいろな形で報道がなされつづけた結果、今日では本学の知名度は予想外に上り、幸い世間的評価も大いに高まりました。

今年も新年早々、13日（月）の朝8時35分からNHK総合テレビ「くらしのジャーナル」で、本学が昨年実施した「学生による講義評価制度」のことが報道されます。時間の許す限り皆様にも是非ご覧いただきたいと願っておりますが、かといって私は、マスコミによってつくり上げられていく本学のイメージを過度に重視してはおりません。むしろ、えてしてこのような場合、イメージは実態を離れて独走するものだということを常に肝に銘じ己を戒めております。

本学には、今年もやるべきことが山積しています。大学院の新設、新学部ないし学科の増設、寄付講座の開設、コミュニティ・カレッジの拡充、多摩大総研の活動の本格化……これらはどれもこれも、それを見事に完成させるには、関係者の卓越した知恵と努力を必要とします。だからこそ私共は、今年を本学にとっての“第2の創業期”と位置づけ、教職員一体となって所期の理想の実現をはかりたいと念願致しております。

レニ・リーフェンシュタール

各　位

野　田　一　夫

目下、渋谷Bunkamuraで「レニ・リーフェンシュタール展」が開催されています。昨年暮、僕は彼女の監督作品『青い光』を観ての帰り立ち寄ったのですが、何よりも、若い人が圧倒的に多かったのには驚きました。展示されている写真の中で一段と鮮やかな色彩を放っていたのは海中の生物たち。解説によると、彼女が海中に魅せられ、止むに止まれず、スキューバダイバーの資格をとったのは、何と71歳のときのこと。

彼女の名前はあのベルリン・オリンピックの素晴らしい記録映画『民族の祭典』『美の祭典』と切り離せません。ダンサーから女優へ、女優から映画監督へ、彼女のイメージは常に、あふれる知性、鋭い感性、そして輝く美貌でした。その彼女ももう89歳。会場に掲げられた大きなポートレートをじいっと見つめながら、僕は思わず過去の彼女の面影をさがし求めました。

ありました！ 何事にもそして何者にも屈しない精神の強靭さが、今の彼女の顔の中に昔通り、いや昔よりも魅力的ににじみ出ていたのです。そういえば彼女は、第二次大戦後ナチ協力者として逮捕投獄されながら、数十回に及んだ訴訟をことごとく冷静に勝ち抜き、遂に無罪を獲ちとりました。すでに42歳になっていた彼女は、この頃アフリカ文化に興味を抱くや、一念発起して芸術写真家を志し、独特な文化を伝承するヌバ族と起居をともにしながら、やがて万人瞠目の作品集を作り上げ、欧米社会にセンセーションをまき起こしました。

何という多彩な才能、いや何という強靭な意志でしょう。僕はつねづね若者たちに接していて、彼らに共通して欠けているものは、才能ではなくて精神力だと信じてきました。だからこそ僕は、「レニ・リーフェンシュタール展」を熱心に観ていた多くの若者たちに、一層心を打たれずにはおられませんでした。

# 親の心子知らず

各　位

野　田　一　夫

…1年間の履修内容をすべて盛り込んだ分厚い履修要項をつくったり、年2回の授業評価アンケートの実施など、「学生の知的好奇心を満足させるサービス業」としての大学を目指してきた。学生の中には「学長はマスコミ受けばかり狙う」という声もあるが、野田氏は意欲のありそうな学生を見つけ、直接面接しては、やる気のある“エリート学生”を捜し求めている。そうした学生が中心となり、昨年、学生新聞を創刊した。彼らが学内全体を活性化するまでにはまだ時間がかかる…。

先週金曜の「日経産業新聞」は「少産化時代の学校経営」という特別記事の中で本学をとりあげ、このように論評しました。もちろん私自身にも取材した上ですが、なかなかいい点をついています。私は開学以来、本学設立の理念をいかに実現しようかと、あらゆる施策を次々に実施してきました。これらに対してマスコミの評価は予想外に高かった結果、本学の世間的知名度は今や、新設大学としては“破格”とまで言われるようになりました。もちろん私は、このことをいささかも得意には思っておりません。むしろ、実態が世間的評価や知名度ほどでないことに、誰よりも責任を感じています。

しかし私はまた、このことにいささかもたじろいではいません。精神の健全な人間は誰でも、自分の属す集団や組織の社会的評価や知名度が高いことに誇りを感じ、だからなおさら仲間と協力して、実態を改善するための前向きの努力をつづける気になるものだ、と信ずるからです。学生の中にはたしかにシラケ者もスネ者も少数いますが、こうした連中も就職ともなれば青くなって会社間を駆けずり廻り、その時こそ、われわれの努力の結果である多摩大の評価と知名度の有難味を、改めて感じてくれることでしょう。

# “いき”と“獣性”

各　位

野　田　一　夫

電通がつくった「生活大予言 1992」によると、われわれの生活にとって、今年のキーワードは“いき”だそうです。1991年にバブルがはじけてみると、日本人には「金で買えないモノへの猛烈な飢餓と、際限のない浪費ゲームの疲弊」が残り、その結果として改めて見直されてきたのが、古来わが国で“いき”と呼ばれてきた美意識である、というわけです。

“いき”という言葉で懐かしく想い起こしたのは、旧制高校生の頃僕が読んだ『“いき”の構造』という本のことです。先輩に手渡されてその題名を見た時には、率直に言って何のことだかさっぱりわかりませんでしたが、読み進むうちに、単に日本人の間で感覚的に認識するほかはない現象を、古今東西の膨大な文献・資料を引用しつつ、これほど理路整然と解明できる九鬼周造の知性と教養と文章表現力に舌を巻いたものです。

九鬼によると、“いき”とは、“媚態”が基調となり、その上に一方では武士道に通ずる“意気地”と、他方では仏教思想の影響である“諦め”と三者が一体となって形成され洗練されて社会的に定着した日本民族独特の美意識です。この中で最も重要な要素である“媚態”を説明するのに、九鬼は永井荷風の『歓楽』の中から「得ようとして、得た後の女ほど情無いものはない」という文章を引用しています。

こうした状態の人間の気持ちは“いき”とは正反対、つまり男女双方の間に介在していた“媚態”は完全に自己消滅しているのです。戦時中に“従軍慰安婦”を必要としたのも、平和が来て懐が暖かくなると大挙“売春ツアー”に出かけたのも、日本の男達です。こうした“獣性”の恥ずかしげもない露出は、日本人の心の中で、“いき”という高度な自制心の産物である洗練された美意識と、果してどう共存できるのでしょうか？

# 新しいトビウオ

各　位

野　田　一　夫

貴花田が優勝しました。私はそれを“時の勢い”と思っています。貴花田を優勝させたいという圧倒的多数の日本人の希いが、“時の勢い”となって貴花田の身体にのり移り、相手力士はその勢いに呑まれて、あたかも八百長のごとく次々に敗退していったのです。それにしても、貴花田が絶えざる稽古のつみ重ねによって心身を鍛えぬいていたからこそ、彼自身は“時の勢い”を重圧と感ぜず、むしろそれを無意識的に活用しえたわけで、実に見上げたものです。

千秋楽の彼の相撲を視ていて、私は昭和24年のロスアンゼルス・全米男子屋外選手権の時の古橋廣之進選手のことを、懐かしく想い起こしました。あの頃はまだ終戦後の経済・社会的混乱期。大部分の日本人はヤセこけてボロを身にまとっていましたが、長い苦しい戦争の後だっただけに、心の中ではみな明るい未来を懸命に模索していました。しかし明るい未来を約束してくれるような兆しを何ひとつ見出せなかった時に、突然、若き青年“フジヤマのトビウオ”が現れ、米国の強豪を抜きさり、世界新記録まで樹立することによって、われわれ日本人に自信とやる気を与えてくれたのです。

今の日本は、あの頃とは比べようもない程の経済的繁栄の中にあります。しかし暖衣飽食の日々を過ごす日本人の心の中には、寒い風が吹いています。国内では気の滅入る事件がつづき、国際社会の中での孤立感は高まる一方です。自国の明るい未来を求めながら暗い現実を打開する材料のない時、日本人には何かのキッカケを掴もうとする国民性が伝統的にあります。貴花田の優勝こそ、日本人にとって正にそうしたキッカケになるのではないでしょうか。新しいトビウオの出現が、日本の明るい未来を拓くキッカケとなることを祈らずにはおれません。

# リーダーの今日的条件

各　位

野　田　一　夫

先日NHK総合テレビで放送された『狙われた政権』は、実に見ごたえのある作品でした。

選挙の結果、大方の予想を裏切って、左翼の闘士ハリー・パーキンスが英国首相の座を射止めます。組閣を終った彼は、早速急進的な内・外政策を矢つぎ早やに実施に移そうとします。これに脅威を感じた旧体制派は、米国を巻き込み、これら政策の実施を必死で阻むとともに、彼自身を失脚させようと、あらゆる謀略をはりめぐらせます。この謀略は徐々に成功を収めてパーキンスを追いつめ、遂に彼は、デッチあげられた醜聞によって、退陣を迫られます。健康を理由に退陣の決意を全国民に伝える筈のテレビカメラの前に座った彼は、しかし、予め秘書官が用意した原稿をワキに置き、自分に仕掛けられた謀略の全貌を冷静に、雄弁に、そして実に説得的に語って行くのです。

驚きました。感動しました。考え込みました。政治家はもとより経営者もそうですが、今日大衆を相手にリーダーとして成功するためには、単に“頭が切れる”とか“人柄がいい”といった人間的属性では足りません。むしろパーキンスのように、謀略には謀略をもって打ち勝つ“したたかさ”とか、決定的瞬間において“大向うをうならせる”雄弁力といった属性こそが貴重なのです。この属性は、古来わが国の学校教育の中では、徹底して軽視され、むしろ否定さえされてきました。宮沢首相はそうした学校教育が生み出した“優等生”といえましょう。

このところやたらに目立つ謝罪と弁解、原稿のギゴチない棒読みに終る公式スピーチ……首相のこういう痛々しい姿を毎日見ていると、大衆が何者をも恐れることの無くなった今日のような時代には、日本にも新しいタイプのリーダーが一日も早く出現しなければ、とつくづく感じさせられます。

「学ぶコミュニティへの発信 ── 自由人・専門人そして市民」

各　位

中村　秀一郎

TIMIS － 141でご紹介しました市民と学生、大学人による1992年度のコミュニティ・カレッジは、3カ月にわたり運営委員会で活発な議論を重ね、ようやく企画決定を見ました。大学にとっても、また、平素市民との交流の少ない学生たちにとっても、いい刺激となっているようです。4～7月は、上記の統一テーマの下、通常講義13科目の公開の他に、「市民講座」と銘打って以下のような連続講座を行うことになりました。新しい多摩の街に豊かなコミュニティと市民文化を創るための情報発信基地としての役割を担いたい、との思いを込めたものです。そのためには、「よき自由人」、「よき専門人」であると同時に「よき市民」となることが求められているのではないでしょうか。

「豊かなライフスタイルと社会」（4～5月：土曜2～4時）

4／11　野田一夫（学長）「新しい時代　新しい発想」

4／25　正村公宏（専修大学教授）「持続可能な豊かさ」

5／9　齋藤裕美（多摩大学助教授）「多摩のまちづくりを考える ── ニュータウン・ウォッチング」（朝日生命ビル集合）

5／23　本間正人（松下政経塾）「多摩から日本を変える」

「地球環境問題を考える」（6～7月：同上）

6／13　小沢徳太郎（スウェーデン大使館科学部環境保護オブザーバー）「『治療志向の国』から『予防志向の国』へ」

6／27　シンポジウム「多摩の都市環境を考える」・パーティ、

7／11　岩崎駿介（筑波大学助教授・92国連ブラジル会議市民連絡会代表世話人）「地球サミットからの報告」

講演は1時間程度で、参加者と講師、参加者間の対話を大切にします。申し込みは4月7日まで。受講料は1テーマ3,000円（1回1,000円、全5,000円）です。詳細については、運営委員会事務局宛にお問い合わせ下さい。（☎0423－37－7185）

# Other People's Money

各　位

野　田　一　夫

宮沢首相の発言によって触発された多くの米国民の怒りと反日的行動が、ニュース記事となってまだ連日新聞の紙面をうめています。日本人の車が傷つけられたとか、家に銃弾が打ち込まれたとなると、宮沢首相は“業務上過失……”で起訴されてもいい位の罪を犯したような気がしますが、テレビに出て来る本人の顔はケロリとしたもので、余計シャクにさわります。

新聞紙面を丹念に読むかぎり、宮沢首相の例の発言は、米国人記者によって部分的に誇張されて伝えられたということは、納得できます。しかし、誤解されそうな発言を首相としてこんな時期にした責任は、問われて当然でしょう。ところで、たとえば彼が「……日本でも米国でも、志あるすぐれた青年の多くが、ローレンス・ガーフィールドのような成功を目ざすとすれば、やはり正常な社会とはいえません。いろいろ問題はあっても、私はむしろ、アンドリュー・ジョーゲンソンのような人物に心魅かれるのです……」というふうに言ったとします。

質問した武藤議員が目をパチクリさせたら、ニッコリ笑い「……失礼しました。もう『アザー・ピープルズ・マネー』をご覧になっていると思って……」と前置きして、簡潔にしかも気のきいたこの映画評でもしたら、これは確実に明るいニュースとして米国に伝わり、多くの米国人の共鳴を呼び、宮沢首相ひいては日本人に対する悪感情氷解のキッカケにすらなったかも知れません。首相とはそうした教養と機知と洗練されたスタンドプレーの持ち主であって欲しいというのが、私の希いです。

因みにノーマン・ジュイソンの傑作「Other People's Money」は、今全国の映画館で上映中です。名優ダニー・デヴィートとグレゴリー・ペックの企業倫理をかけての対決は、“バブル崩壊期”の日本人にとって、真に教訓的で心にしみます。

# 多摩大はまだ目覚めない

各　位

野　田　一　夫

先週末僕の手元に本学学生から一通の手紙が届きました。レポート用紙9枚に細かい字でびっしり書きつづられた本学の現状に対する慨嘆文。送り手は1年生の内田純一君でした。

同君は受験生の頃から、勉強のかたわら本学に関する本や雑誌記事を読み漁り、期待に胸ふくらませて本学を受験して見事合格したのです。しかし残念ながら、入学してみると現実は、講義も設備も同級生も、同君の期待を大きく裏切るものでした。入学後同君と親しくなった敬愛できる友人の中2人は、同じく本学に失望してやがて大学に姿を見せなくなりました。マスコミであれ程喧伝された“多摩大学の理想”は一体どうなったのか……悩み抜いた末、止むに止まれぬ気持に駆られて、同君は学長である僕に直訴状を書き送ったわけです。

一読して心打たれた僕はその夜すぐ同君に電話し、日曜午後には新宿で会い、同君が連れてきた同じ本学1年の畠山晋一君も加わって、昼食を食べながら実に約3時間喋りつづけました。「……去るか、諦めるか、踏み留って一緒に理想を目指すか、選択は3つしかない。どれを選ぶも君達の自由だが、創立者の僕にはそんな自由はない。現実がどんなに予想外のものであったとしても、それが建学の理念の責任にはならない。諸君は他人の築いた実績にあやかりたかったのか、それとも自分達で築き上げた実績で後進に恵みを遺したいのか。不満を言うより建設的策を練れ。今を嘆くな未来を夢みよ……」

時が経つにつれ、語る者も聞く者も熱っぽくなり、やがて多摩大学の現状を何としても創立の理想に一歩一歩近づけねば、というほのぼのとした共感が生まれました。年は親子以上に違っても、別れぎわに交わした男と男の握手には、確かな暖かい血が通っていました。真に教師冥利を味わえた1日です。

# 希わくは惜しまれつつ

各　位

野　田　一　夫

いよいよ3月となりました。入試を全て終えて新入生が決まると、多摩大学は初めて1〜4年生が揃い、来年第1回卒業生を出した時点で文部省認可の“完成年”を迎え、やっと一人前の大学となるわけです。毎週皆様にお送り申し上げてきたTIMISは創刊3周年間近です。TIMISの前身Rapportは71号でTIMIS 1号にバトンタッチされましたから、このハガキ通信は4年数カ月、一週も欠かすことなく書き送られてきたことになります。この間読者は数十名から1,600名へと拡がりました。執筆者として有難さの極みです。

しかし、執筆者として私は常に、このハガキ通信をいつ終らせようかと考えつづけてきました。物事はみな、有形無形を問わず、無理に長く続けようとすると、何時しか当初の趣旨から逸脱し、関係者から疎んぜられ、やがて恨みの残る終末を迎えがちです。ですから、このささやかな通信文も、初心を忘れぬよう、マンネリ化におちいらぬよう、毎回毎回私自身は心をこめて執筆してきたつもりですが、それでも、これもどうやらひとつの幕引きの時を迎えつつあるような気がしてなりません。

完成年度を迎える来年3月末までとも考えましたが、思い立ったら、早いに越したことはありません。1年早く、この3月末155号をもって最終号とさせて頂きたいと存じます。こうした一方的宣言を抜打ち的に行うことは、読者の方々に対してあるいは無責任かつ失礼かと思い、1カ月前のこの号で予告を申し上げる次第です。今後多摩大学責任者から皆様へのメッセージをどのような形で行えば良いかにつき、もし各位にご提案なぞございましたら、過去のTIMISへのご感想をも含め、ご一報頂ければ幸甚に存じます。希わくは、TIMISが皆様に“惜しまれつつ”終わりを全うできますように……。

# 一流ホテルで一流の講義を

各　位

野　田　一　夫

経済雑誌『週刊ダイヤモンド』が、広汎な企業アンケート調査に基づき、今週号で「人事部が評価した役立つ大学」という特集をしていますが、驚いたことに「今後注目すべき大学」の中で慶應、早稲田、上智、国際基督教（ICU）につぎ、阪大と並んで本学が5位にランクされています。あとには法政、亜細亜、東大…が続いていることでもお解りのように、本来新設大学は対象とはならない調査の筈です。

産業界の本学への熱い期待を示す意外なこの数字を前にして、率直に申すと、私は誇りよりはむしろ、ずっしりと重い責任を感じてなりません。であればこそ、私共は教職員一体となって、世間の過分の期待に応えるだけの実態の形成に今後一層の努力を傾ける必要があります。この努力のひとつのあらわれが今年5月より発足する“多摩大学公開講座”です。

これは、3年前の開設時に打ち出した教育方針「社会人を相手にできる大学」に基づくものです。しかしこの方針を実施に移すためには①交通至便、かつ快適な居住性をもつ場所の確保、②時代性があり、かつ他大学が開設していない授業科目の選択、③最高の講師陣の編成、④在来の大学では実施困難な革新的教育方法の開発、⑤受講者の経済的負担の軽減策…等々、現実的に幾多の困難がありました。

しかし幸い、⑤に関しては大和ハウス工業（株）、（社）日本フードサービス協会、（株）イトーキ3機関より合計5つの寄付講座を頂戴でき、また①に関しては新宿京王プラザホテルのご協力申し出があったことによって、いよいよ懸案のプロジェクトは陽の目を見ることとなりました。会場は上記ホテル47階の大会議室、日時、授業科目、講師陣、その他細目については近く皆様方にプロッシュアをお送り申し上げます。乞御期待！

# 鈴屋の入社式

各　位

野　田　一　夫

来る4月10日、本学は第4回入学式をパルテノン多摩で挙行します。今年の入学式の特徴は2つです。ひとつは新入生が何と約400名に激増したことです。意図的に学生を多数合格させたのではありません。例年の経験に基づいて控え目に合格ラインを設定し発表したのですが、手続き率が予想外に高かったのです。喜ぶべき現象とはいえ、頭をかかえざるをえません。

第2は、入学式と同時に在校生のうち、学業その他で特筆すべき実績を収めた学生を表彰することです。受賞者の正式名称はThe Most Outstanding Student of the Class, 略称MOSC、新入生の何よりの励みとなり、今後在学中何回MOSCを獲ったかがひとつの目標となるに違いありません。

さて、入学式というと、私の頭に浮かぶのはファッション業界の最大手㈱鈴屋の入社式です。東京、大阪をはじめ全国の都市の盛り場に店舗網をもつ鈴屋のことですから、買物に入られた方々は多いと思いますが、店員一人一人の接客態度のすがすがしさには定評があります。私はその源泉が同社の入社式にあると信じます。毎年ご招待を受けますが、伝統的様式に則ってしかもモダンに、厳粛さが漂いながらしかも暖かく、もりだくさんの内容でしかも快テンポに……といった演出の巧みさは、正に“入学式”のモデルといえます。

本学の入学式の今年の特徴は前述のMOSCの表彰を行うことと、ゲストに三浦雄一郎氏を迎え、新入生諸君に対し“リスクに挑戦する”精神について語って頂くことです。そして今ひとつ、少しでも鈴屋の入社式に近い雰囲気を出したいこと。新入生諸君が、大学生として単に勉学のみならず、礼儀作法、態度物腰、言葉遣い、目つき顔つき歩き方まで、素晴らしい青年に育っていく門出にしたいと、私は念願しています。

# 小さなスペース、大きな友垣

各　位

野　田　一　夫

すでに151号で予告申し上げましたが、TIMISは次号をもってひとまず終結と致します。この数週間多くの方々から数々の惜別のお言葉を頂戴し身に余る光栄と感じております。そのひとつ、高田和雄氏の一文を謹んで掲載させて頂きます。来週は皆様へ私のご挨拶文をお送り申し上げるつもりでおります。

「創設4年目の多摩大が次々に打ち出している新しい人材づくりの教育施策は、活字・映像・電波を駆使した広報活動の効果というより、実際にはもっと素晴らしい内容があると世間が高く評価しています。しかしその反面、学内ではイメージと現実に大きなギャップがあることを認識し、ハガキ通信は再三にわたって“多摩大の敵は多摩大の内部にいる”と自らを戒め、地道な努力の実践を強調していたのが印象に残っています。

あと1年経てば、初めての卒業生を送り出します。彼らは社会人の仲間入りをしますがその時、世間はどんな反応を示すでしょうか、その時の答えこそが多摩大の真価を示すでしょう。今まさに前評価が高いだけに、このまま神話では終わらせたくありません。ゼロからスタートした多摩大の歩みは、新しい事業を立ちあがらせるビジネスの世界と共通するものを感じ、自分のビジネスにも活用させて頂きました。

ハガキ通信にあった忙しい中でのゆとりの見つけ方は早速実行しました。ダリ展、レニ・リーフェンシュタール展などに足を運び、更にブリスベンまで出かけて壮大な落日を眺めつつ、人脈ネットワークづくりは、これからの課題があることを痛感したのはその一例です。ハガキはタテ15.4センチ、ヨコ10.4センチという小さなスペースしかありませんが、その中に盛られた新鮮な数々は、この3年間で私にとっては計り知れない程の大きさの連続でした。」

# けふもまたこころの……

各　位

野　田　一　夫

「けふもまたこころの鉦をうち鳴らしうち鳴らしつつあくがれて行く」、“漂泊の詩人”と言われた若山牧水の代表作です。学生の頃から歌は詠みませんが、万葉集から俵万智まで好んで歌を読みつづけてきました。だから、少なくとも百首以上はそらんじている筈です。こんな僕にとって歌は単に趣味といったものではなく、時に処世の武器となり、時に心の支えとなってくれました。

冒頭の牧水の歌をこの人生で何回口にしたことでしょう。僕なりに目標や理想を追い求めては厚い現実の壁にぶつかり悪戦苦闘している時なぞ、身も心も疲れはてて夜遅く家へ帰り、何もかもぶんなげたくなる自分を励ますために、この歌を念仏のように唱えたものです。牧水がどういう状況下で何を言いたくてこの歌を詠んだのかは知りませんし、また知りたくありません。しかし、この歌を口にする時、僕の心には牧水いや歌人いや文学そのものに対する深い敬愛の念が沸きおこってきます。

多摩大学の創設、これは僕の人生の中では比較的苦労の少なかった事業です。多くの信頼できる協力者に恵まれて事業を推進できたからです。とくにヒデさんこと中村秀一郎氏と毎日のように相談し、激励し合い、喜びと悲しみを共にしてきた想い出は常に僕の心に暖かく、終生忘れえないでしょう。

それでも、僕は過去5年間、少なくとも月に何回かは、牧水の歌を唱えながら眠りにつきました。高い理想を求めて事業を推進しつづけるかぎり、責任者に安らぎはありません。4年4カ月にわたって毎週皆様に読んで頂いたハガキ通信は、実はその時々の僕の心の叫びであり、ボヤキであり、訴えであったのかも知れません。そう想い返しつつ、長い間のご愛読に対し、改めて心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

# おわりに

野田一夫

TIMISは156号をもって終了いたしました。ご承知のごとくTIMISの前身は、多摩大学設立以前に関係者および本学設立に特別関心を寄せてくださっていた方々に対して、小生が毎週書き送らせて頂いたハガキ通信Rapportです。Rapportは昭和62年12月第1週から、第1回の入学式の行われた前の週まで71号つづけられたのち『多摩大学設立の歩み』と題する小冊子に集成されました。これに因んで私共は、TIMIS1号～最終号までを『多摩大学の1000日』として集成し、皆様方のお手元にお贈りすることにしました。

多摩大学の第1回入学式がパルテノン多摩で行われた週から、時々中村秀一郎氏にも加わって頂き、教学責任者としてのおりおのの所感、提案、ご報告等などを毎週書きつづったものです。過ぎ去ってしまえば、1000日はあっという間だった気がします。しかし、この小冊子のページをくりながら来し方をふり返ると、多摩大学に関してはこの間実にいろいろなことが思い出されます。幸いにして、私共がこの理念に沿って打ち出した教育上の方法や措置は世間から予想外に高い評価を受け、マスコミはほとんど間断なく実にさまざまな形で多摩大学をとり上げてくれました。結果として今や多摩大学は、新設大学としては前例のないほど“知名度”を高めたといえます。

しかし自重せねばならぬことは、知名度の高まりは必ずしも実体の質的向上をいささかも意味してはいないということです。私共は今後も地味な努力をつみ重ね、知名度にふさわしい実体を備えた大学をつくり上げていくつもりです。何卒今後とも、多摩大学に対して変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げる次第です。